



『我等の同志社』表紙

奥村龍三氏（元専務理事）

に聴く

昭和十年代の同志社

聴き手

河野 仁 昭

学生時代の思い出

——奥村さんは同志社で卒業ですね。

奥村 大正三年、政治経済部経済科です。卒業の前年、明治四十五年四月に専門学校令による大学になりましたね、入学したのは専門学校でした。

——当時は、どんな先生がおられたんですか。

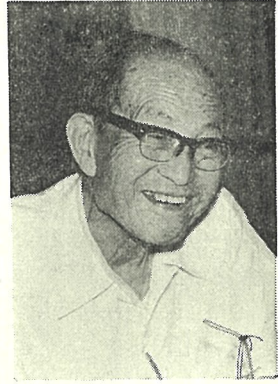
奥村 経済科主任の水崎基一先生、和田琳熊先生、米田庄太郎先生などが中心でした。他は京都大学の教授でね、河上肇先生、河田嗣郎先生とか。卒業間際に専任で中川精吉、滝本誠一といった方が来られました。

水崎先生は修身の授業で「新島先生伝」を講義され、私たちはノートをとったんですが、先生は講義しながら泣きましたよ。感激屋だったですねえ。河上肇先生も「マルクス伝」を講義しながら泣いたこともありました。当時は社会主義が盛んな頃で、私は先生の感化を受けて卒業論文を「唯物史観」というテーマで書きましてね。河田嗣郎先生の講義もよかったです。農政学の授業なんですが、講義の合間に文学の話などもされ、「君たち

も厨川白村の著書とか谷崎潤一郎の小説ぐらい読まなきゃ駄目だ」と言われるものだから、皆で買ってきて、西寮へ英文科の者も集って読書会をやったりしたものです。米田庄太郎先生は授業の前に校庭を散歩しながらフックスの原書を読み、それから教室へ来て経済原理の講義をされた。私たちは上田敏先生の講義も聞きました。

私のクラスに浅野恵二君がいて、彼は米田先生に可愛がられていて、先生の家へ留守番に行ったりしていましたね、彼に連れられて米田先生のお宅へ遊びに行ったこともありました。当時は学生が少なかつたから、原田助先生のお宅とか、その他の先生方の家へ、皆で行ったものです。京大から来られる先生方は講師だから、滅多にそういう機会はなかったですが、河上肇先生が「遊びに来なさい」といって下さったものだから、一度行ったことがあります。何の話をしたか覚えていませんが、感激したものです。学生時代のことでは、そういったことがいけば印象に残っています。

神戸YMCAとのかかわり



奥村龍三氏

——卒業されてすぐY M C Aへ入られたんですか。

奥村 いや、卒業して就職したのは、商業興信所神戸支所です。興信所の板原兵三郎所長（同志社出身）から、英語の出来る人を紹介して欲しい、三年勤めたら興信事業研究でニューヨークへ留学させるといふ条件で、同志社へ依頼があった。それで水崎先生が推薦して下さったわけです。ところが神戸へ行っただころ下宿がない。たまたまY M C Aに寄宿舎があり、若者が六〇人ほど居た。そこへ入ったところで、私が同志社出身でクリスチャンだということで、夜学校の英語の授業を頼まれたりしましてね、そのうちに毎晩のように教えさせられるようになってきた。興信所の仕事もあまり面白くないし、Y M C Aの主

事のアメリカー人や理事長が熱心にすすめてくれるものだから、水崎先生は転職しないほうがいいと言って下さったんですが、二年ばかり興信所に勤めた後、Y M C Aに移ったのです。それから二〇年勤め、外国へも二度行きました。

同志社事業部長に就任

——湯浅八郎総長に同志社へ招かれた、とうかがっていますか。

奥村 湯浅先生は普通学校で私の一級上でしたが、その頃から知っておりましてね。大工原総長が病気で亡くなられた後、理事会の推薦で湯浅先生が総長になられた（昭和十年二月）。総長に就任してみると、同志社には金が必要だ、それには募金をせよならんといふことになりましたね。湯浅という人はなかなかアイデアマンで、いろんな構想もっていた。それを表現するには金がいるわけです。そこで、Y M C Aで募金運動の経験もある奥村に来てもらおうということになったようです。

私はY M C Aを辞める気は毛頭なかったし、辞めることに反対もされました。しかし

湯浅総長からは「共に祈る友人が欲しい」などと口説かれるし、Y M C Aの仕事だとして私でなきゃ出来ないというものじゃない、誰にでも出来るはずだと考えるようになって、同志社に臨時に設けられた事業部の部長になったわけです。そこで、新しい事業をやるには、同志社を世間に宣伝し訴える必要があるものだから、『我等の同志社』というような雑誌をつくりましてね。兎玉実用さんに頼んだところ学生の手助けもえられ、その頃はくは荒神橋を渡ったところのY M C A青年の家に住んでいたものだから、夜は三、四人の学生に来てもらって、寝食を共にして編集したものです。

そうこうしていたところが、岩倉の高商業学校武道場で、いわゆる神棚事件が起こった（昭和十年六月）。高商その他にいた配属将校たちがからんで来て、うるさいことを言うわけですよ、問題はそれでむずかしいことになった。

配属将校と同志社

——配属将校たちがかきまわしたわけですね。

奥村 そうなんです。私や浅野恵二庶務部長が学校側の窓口になって話あうんだが、なんだかんだと同志社の教育のやり方に文句をつける。そして話の結着がつかないと、こまかいことまでいちいち師団へ報告するわけです。すると師団からは、「同志社が国家の方針に反する教育をやるなら、徴兵猶予の特典は取り消すぞ」と言ってきたましてねえ。

神棚事件は総長が伏見の師団へ行って事情を説明し、一応片付いたんだが、今度は奉安殿が必要だと彼らは言いだした。そのころ天皇陛下のご真影は岩倉の高商にしかなくて、式典のときには今出川の方へそれを借りてきていた。「そんな不便なことをしなくても、大学も奉戴すりゃいいじゃないか」というわけです。それで奉戴しまして、中学の彰栄館に安置室を設け、部長クラス以上の者が交替で宿直して警備しておった。すると、「そんなやり方ではいかん、奉安殿を作れ」と、やかましく言うわけです。

大学の予科に草川靖という配属将校がおりましてねえ、これが実にひどい男なんです。あの年の紀元節の後でしたが、予科の教授室で茶話会があった。その席へ草川氏が大きな軍

刀を下げて入ってきた。それを見て湯浅総長が気触に、「草川さん、立派な軍刀ですが重いでしょ」と言った。すると怒りましてね。「軍人に向って、日本刀が重いとは何ごとか」(笑)。まア、ことごとくそんな調子なんだなア。しかし、なかには同志社の教育に理解のある立派な配属将校もおりましたよ、しばらくの間でしたが高商に遠藤という配属将校がいた。この人は後に大阪の師団の参謀になり、少将にまで昇進しましたが、つねづね「同志社の教育こそ真の教育だ」と言っており、新島先生永眠記念日の前日一月二十二日には、高商の生徒を引率して若王子山の墓地へ登り、夜を徹して火を焚いて墓地を掃除するなどして、翌朝の祈禱会の準備をされた。誰にも真似が出来ないことですよ。

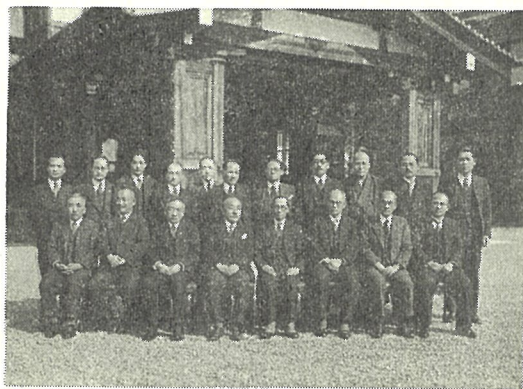
浅野恵二さんのこと

——ところで、浅野恵二庶務部長は、配属将校についての発言が問題になって同志社を辞めたんでしょう。

奥村 宝塚で、キリスト教教育委員会の会合があった。そこでキリスト教教育はどうあるべきかといったことが検討されたんだが、

浅野さんが同志社の実情を報告することになって、「配属将校が教育方針をいちいち批判するので、やりにくくて仕様がな」という意味のことを言ったわけです。それが配属将校の耳へ入り、「浅野はけしからん」ということで騒ぎ出した。

——それで辞表を出されたわけですね(昭和十二年七月)。湯浅総長や理事会は、浅野さんを守ってあげるわけにはいかなかったん



幹部職員協議会 於奈良ホテル

ですか。

奥村 守ってあげるとかあげないの問題じゃない、誰が説得しても辞職の意志を曲げないんだよ。辞めてしばらくたってから考えが変ってきて、「あんなことで同志社を辞めるべきじゃなかった」と言うようになりましてね。他に仕事の口はあったようだが、島本徳三郎とか三宅駿一理事を通して復職の意思表示をしてきた。それで私たちも理事会でも、図書館長にどうだろうとか、亡くなられた鷲尾健治高商校長の後任にどうだろうとか、そのポストをいろいろ考えもし先生方とも相談しておったところが、部長会が浅野さんの復職を否決して、理事会へ申し入れてきたんですよ。

浅野さんは在職中に、日野真澄先生とか和田琳熊先生など部長クラスの先生方が言ってくる来られることについても、規則を盾にとってはねつけられることがよくあった。その言いかたがまたきついんだ、それで反感をかっていたわけです。「浅野さんの復職は困る」と、部長会が決めましたね。

——よく出来る人だったんでしよう。

奥村 そりゃ大した秀才だった、岡山の倉

敷出身でね。同志社の普通学校を卒業して、第一高等学校へ合格するという実力があつた。一高在学中に学費を出してくれていた兄さんが亡くなり、同志社専門学校へ帰ってきただけです。苦学力行でねえ、よく頑張りましたが、それだけに厳しいんだ、ものの言い方がきつい上に理論でせめてくる。職員の間でもこわがられていました。しかし、本当はなかなか世話好きでね、よく人の世話もするんだが、世話になった人から感謝されなかったなア、人柄はそうじゃなかったんだが……。同志社事務局の組織をきちんと整備したのもあの人ですよ。

創立六〇周年事業募金運動

——さっき、雑誌『我等の同志社』のお話ででしたが、六〇周年の募金の目標額はいくらだったんですか。

奥村 二〇〇万円。

——具体的にはどんな方法をとられたんですか。

奥村 学生については授業料と一緒に入学のとき確か五〇円納めてもらう、これを五年間続けることにしました。それから、これは

私流のやり方なんですが、私は神戸のYMCAで募金をやったとき、まだ独身だったから月給七五円でしたが、寄宿舎でなら一五円で暮せたものだから、残り五〇円か五五円を二年間寄付することにした。率先してやらなきゃ人に訴え、人を動かすことはできませんからね。すると理事などがびっくりして、「奥村がそこまでやるのなら、われわれは当初の予定の倍額出そじゃないか」、ということになった。

同志社でもそういうやり方をするほかないと思ひ、湯浅総長が私の案に賛成してくれたものだから、総長も私も毎月月給の二割を寄付することにしよう、教職員もせひそういう線で協力して欲しいということで、チャペルで祈禱会を開いたりして教職員に訴えた。ところが学内では〇教授とか二、三の有力教授たちが、「薄給であるにもかかわらず、その中から二割出せ一割出せというのは無茶な話だ」と言いだして、学外でも吹聴した。だから卒業生の中には、「学内でも賛成してないそうじゃないか」と言う者が出るようになってしまつてね。あの運動がうまくいっていたら一つの間接運動にもなつただろうと思つたんだ



湯浅八郎氏(総長就任当時)

が、うまくいきませんでした。しかし、たとえば青木要吉氏など、「湯浅総長や奥村がそこまで考え、背水の陣を敷いてやろうとしているのなら助けにゃいかん」と言っていて、三〇万円出そうと言うてくれたり、徳富蘇峰先生もいろいろ知恵をかしてくれましたね。私は総長と、徳富先生のアドバイスに従って東京の校友有力者などを歴訪したんですが、深井英五先生とかね、なかなか難しかった。

そのうちに戦争が激しくなり、募金は余計に難しいことになってきまして、あまりよい成績を収めることはできませんでしたよ。

——最終的には、目標の何割ぐらい集まったんですか。

奥村 確か三分の一ぐらい払い込みがあったと思います。

——まアまあ成功じゃないですか。(笑)
奥村 当時としては、成功かも知れませんが。募金はむずかしいことだから。あの水崎基一先生の如き方がやってさえ、満額達成はできなかったんですからねえ。最後まで払い込んで下さった方が何人かいましたが、その中の一人は救世軍の山室軍平先生でした。

「教育綱領」と上申書事件

——「同志社教育綱領」の制定(昭和十二年三月)には、奥村さんは直接関係されなかったんですか。

奥村 いや、私は湯浅総長のもとにおったからね、関係しないわけにいかなかった。原案を持って東京へ行き、海老名弾正、小崎弘道といった先生に見ていただき、「まア、これでよかろう」と言われて公表に踏み切った。ところがその前に、法学部の野村重臣という助教が右翼的な論文を書いて『同志社論叢』に載せてくれといて提出したところ、編集委員会は載せるわけにいかんといって断わるという事件があって(昭和十一年二月)、それ以前から教員が対立していた法学部の空気は、極端に険悪になってきた。それで

野村助教らは同志社はけしからん、湯浅は「アカ」だと宣伝してまわるわけだ。湯浅総長はリベラリストだから、野村さんの論文を見て、載せないのが当然だという考えをもっていたわけですよ。

——湯浅先生は、林要先生を高く評価しておられたようですね。

奥村 そうなんだ、「林要はマルキストだ」などと、野村さんはパンフレットまで作って宣伝してまわったんだが、林さんはマルキストじゃない。そりゃ唯物論やマルクスを学んではいたでしょうが、学問も出来る立派な学者でしたよ。「私がいたら皆さんにご迷惑をかける」と言って辞職されましたが、同志社は本当に惜しい人材を失いました。

——そんなことから上申書事件(昭和十二年三月)に発展したわけですね。

奥村 論文掲載を拒否された野村助教と親しくしておった先生方が、その反対派の先生方の名前をあげて、「教育綱領」に反する連中だから解職すべきだと、「教育綱領」を盾に取って総長に迫ったわけです。湯浅さんも困りましてねえ。

——その渦中に中島今朝吾憲兵司令官が京

都へきて、総長などと話ありますが、同志社がお願いしたんですか。

奥村 それはね、当時同志社にはいろいろ問題が起きるものだから、理事であった近江兄弟社の吉田悦蔵氏が、「同志社にも法律の専門家を顧問として置いたらよい。近江兄弟社では山下彬磨という弁護士に顧問になっていただいて、いろいろ助けてもらっている。紹介しようじゃないか」と言い出されて、湯浅総長が山下弁護士に会い、同志社へも来ていただくことになった。その山下弁護士が中島憲兵隊長と竹馬の友で、幼いときから親しくしていた。それで、「中島中将に相談してみたらどうか」と総長に言いました。吉田悦蔵氏と一緒に東京へ会いに行ったのです。会ってみると湯浅さんが共鳴するような一面もありましたね。

——中島中将と湯浅総長との、京都ホテルでの会談内容はわからないんですか。

奥村 密室でやられたことですからねえ、吉田氏は同席しましたが。

——とにかく大変な時代だったんだなアということは、私などにもわかります。

奥村 配属将校のみでなく、右翼がうるさ

かった、洛北青年同盟の中川裕とか、西陣の若松華瑤とか、いろんな人がいましたよ。さらに右翼系の新聞が京都にもあり、神棚事件など「同志社は武神を追放す！」といった調子の記事を掲げましたね。それからも、同志社はアカの巣窟だと、そりゃひどいことを書きたてる。それで、山下弁護士が言い出して、同志社教育は愛国教育なんだということで大新聞に書いてもらって、同志社の教育を世間に正しく理解していただくようじゃないか、ということになった。それで山下弁護士と一緒に徳富蘇峰先生を訪問し、ほとんど徹夜で書いた新聞発表用の原稿を見ていただき、徳富先生に言われて深井英五先生のお宅へ相談に行ったら、「このようなものは発表しないほうがよい、発表すれば問題は複雑になる一方だから」と言われまして、発表を断念したことなどもありました。

——チャペル籠城事件(昭和十二年七月)も、配属将校や右翼の策動とみていいですか。

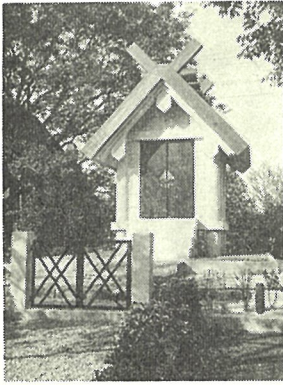
奥村 中心は大学予科の学生ですが、右翼的な大学国防研究会の学生がリーダーでしただ。影で配属将校が動いていたと思います。

その時の学生主事が生島吉造君で、いろいろ骨を折って籠城を解かそうとするんだが、言うことを聞かないんだ。生島君は学生のためを思って仕事をすすめるいい学生主事でした。

湯浅総長の退陣

——大戦前夜の同志社で、いろいろご苦勞をなさった揚句、湯浅総長は辞任されますね(昭和十二年十二月)。辞任の直接の原因はなんでしょうか。

奥村 直接には予科教授が治安維持法違反の容疑で逮捕されたことだと思えますが、その問題も含めて疲れきっていたと思えますよ。右翼系の新聞は「同志社はアカの温床だ」と書きたてる、配属将校はかきまわすわ右翼学生は騒動を起こすわ、法学部教授会は分裂したままだわ、いい材料はなにひとつない。同志社にいるのが辛くなってきていたんじゃないですかねえ。あるとき、校友会総会の後でしたが、私が下鴨のご自宅へ「これから事件の処理についてご相談をしにうかがいたい」と言ったら、「疲れているので、今日はんべんしてくれ」と言われた。それまでそんなこと言ったり、弱音を吐く人じゃな



今出川校地の奉安殿

つたですよ。
予科教授三名が検挙されず、総長は警察へ事情を聞きに行きましたが、「取調べ中だからなんともわからん」という返事ですね。帰ってきて、「若し有罪なら総長として責任をとらなきゃならん」と、私たちに言われました。ところが右翼系の新聞はこぞとばかり書きたてるし、同志社に対する世間の評判もあまりよくない。おまけに、逮捕された先生方はいつ釈放されることやわからず。そうこうしていたら、「蘇峰叔父に相談してみろ」と総長が言い出しましてね、私は東京までお供したんです。そして銀座七丁目の徳富先生の事務所へ行き、私は一階で待っていたんですが、二時間近く話あってから降りて

きて、「奥村君、散歩しよう、銀座へ行こう」とさそいまして、表通りを歩きながら「ぼくは総長を辞めるよ」と言うんだ。「そんなバカな、辞めたら全面的な敗北じゃないですか」「叔父（蘇峰）は、これ以上お前が頑張つて総長の座にとどまれば、同志社はいよいよアカの巢窟だということにされてしまう、同志社のためにいま辞めるべきだ」という意見なんだ、だからぼくは辞めたほうがいいと思う。」そう言ってきたくないんですよ。それでは大沢徳太郎理事に、緊急に理事会を開いて欲しいと電話して、翌日の臨時理事会の席で湯浅総長の意思を伝え、諒承をえたわけです。私も辞表を出したんですが、「宮内省から二度もご内帑金をいただいている事業を中止するわけにいかん」という理由で、私の辞表は受理していただけませんでした。

総長後任問題

——湯浅総長辞任の後、牧野虎次先生が就任されるまでに、かなり時間がかかっていましたね。

奥村 湯浅先生の後任には西尾幸太郎先生がいいということですね、弟さんは陸軍大將で

もありますので。私が頼みに行ったら「考えてみましよう」といういいお返辞だった。ところが、その直後に大阪中之島公会堂で組合教会の総会があり、その会での講演で、西尾先生は「罪あらば我を咎めよ天つ神民は我身の生みし子なれば」という明治天皇の御製を、キリスト教の愛の精神に結びつけて語られるつもりで、繰り返し唱えられていて、「我は我身の生みし子なれば」と言い誤られたのです。すると聴衆から、「誤読！ 誤読！」とただちに指摘され、憲兵にもとがめられまして、先生は「一切の公職を辞退する」とその場で言ってしまったんだ。そんなことで総長就任が駄目になってねえ、実に残念でした。

——それで牧野先生に？

奥村 そうです。さしあたり総長事務取扱になっていたいただいて（昭和十三年七月）、ゆっくり後任を探そうではないか、ということになりましたね。

——昭和十六年七月に総長に就任され、二十一年十二月まで勤められたようですが、どんな方だったんですか。

奥村 そりゃよく勤められる方でしたよ。憲兵隊や警察の下級の方が異動しても、「奥

村君、ちょっと挨拶に行つてこうやないか」(笑)、そんな調子で、いろいろ気を使ひましてねえ。だから勤まったのだと思います。それと、大変筆まめな方でした。

——奥村さんは戦後も要職を歴任され(理事會セクレタリー、専務理事など)、大変だったと思いますが、定年まで同志社におられたんですか。

奥村 戦後は千田民衛さんがよくやって下さったからね、苦勞というほどのことでもなかったですよ。私はかねがね六十歳で辞めると言つており、六十歳で退職しました。田舎の学校で英語の教師でもしようと思つていたんだが、商會社から招かれたりで、思つたような具合にはいきませんでした。いまま淀川キリスト教病院の現職(理事長)なんですよ。

——大変な時代に、本当にご苦勞さまでした。今日は長時間いろいろお話ただいて、有難うございました。

(神戸市の奥村邸にて 一九八〇年八月七日収録)

『同志社百年史』について

「通史編」(全二巻)

同志社百年の歴史を五つに時代区分し、次の五部から成つている。

第一部 創業と成育(明治前半期)

第二部 キリスト教教育の受難(明治後半期)

第三部 大学への道(大正期)

第四部 戦時下の学府(昭和前半期)

第五部 再生と発展(昭和後半期)

上野直藏総長は「通史編」の「序」で、「同志社における徳育の基礎であるキリスト教は、それがキリスト教たるがゆえに、少なくとも一九四五年にいたるまで国粹的権威筋から胡乱な目でみられ、疑問視され、敵視されてきた。(中略)同志社を護るための先人たちのすさまじいまでの攻防は、まさに一つのドラマであり、読むものをして緊張と畏怖の念を起こさせるであろう。この書は同志社の犯した数々の失敗や恥辱の部分をも隠すことなく記している。」と述べておられる。ラットランドのグレイス教会における新島襄の、学校設立に関する訴えを起点とする「通史編」は、確かに、キリスト教主義をめぐる同志社の攻防を軸に展

開されているといえよう。もちろん同志社の諸制度や諸学校の変遷、そこで生きた学生生徒を含む諸先輩の動向などは、それぞれ独自に、読者に訴えるものをもつはずである。

「資料編」(全二巻)

「通史編」の叙述に用いられた基礎資料およびそれに関連のあるものを中心に編纂されている。同志社開業関係にはじまり一九七五年度までの主要な資料を収録、原資料による同志社百年史といつてよく、それ自体自立性をもっている。収録資料三五〇点、従来活字になつていなかったもの、すなわち未公開資料が数多く含まれており、読者は同志社史の新しい一面を見出すであろう。研究者の期待にも応えうるものである。詳しい同志社年表を添えてある。

「通史編」約一七〇〇ページ。

掲載写真 三二五点。

頒価 一六〇〇円

送料不要の場合 五四〇〇円

「資料編」約三〇〇〇ページ。

頒価 一、二〇〇〇円送料不用の場合 一〇八〇〇円

発行・学校法人同志社
取扱い・同志社収益事業課

(電話)〇七五―二五―一三〇三八